

最近の日本における五四運動研究

——五四運動の歴史的意義をめぐる若干の問題——

(京都大学教授) 狭間 直樹

これは1984年6月28日(木)午後、中国北京の人民大学でおこなった講演である。人民大学の学内掲示では《学術報告会・五四運動》とされていたが、ここではもともと提出しておいた題をもちいた。司会は戴逸^{ダイイー}先生。彭明^{ボンミン}・李文海^{リーウエンハイ}・王汝豊^{ワンルーフオン}らの諸先生も出席してくださった。中国語に訳する困難からはしおった部分を若干補ったが、それはもちろん論旨に影響するものではない。

尊敬する先生がたならびに友人のみなさん、わたしのためにこのような学術報告会を設けてくださったことにたいし、心から感謝します。ただ、話に中身がなくて時間を浪費させるだけに終らないかと心配です。また中国語が下手ですから間違いも多いと思いますが、御容赦ください。

わたしは日本の京都大学人文科学研究所に勤めています。去年(1983年)に貴学の戴逸先生に来学をお願いしたところ、御多忙のなかを快よく引き受けてくださいました。3カ月にわたりたびたび授業・講演をしてくださいましたので、先生はお疲れになったでしょうが、わたしどもは大いに得るところがありました。この機会をかりてあらためてお礼を申し上げます。また、もう10年にもなりますが、京都に来られて意義ぶかい報告をしてくださった王汝豊先生にも感謝します。

さて、以下に今日のテーマである“最近の日本における五四運動研究”について話したいと思います。

〔Ⅰ〕 京都大学人文科学研究所の五四運動研究

まず、自分たちのやっていることから話します。戴逸先生がいくらか御紹介くださっているかもしれませんが、概略を簡単にふれてみます。

日本の中国史研究の中心は、地域的にいえば、東京と京都です。このばあい、京都は大阪・神戸もふくんだ言いかたで、京阪神というに等しいものです。わたしたち京大人文研は、その京都での比較的重要な研究単位です。

わが人文研は、1983年末現在で55名の研究人員を擁しています。そのうちの約半数27名が東方部に属して中国研究に従事しています。東方部のほかに日本部と西洋部があります。東方部27名のうち、教授は8名、助教授7名、助手12名、なかで中国近現代史研究の専門家は4名です。ですから、わが研究所東方部は前近代(古代)の中国研究を主とする研究機関なのです。

わが所のメンバーのもっとも重要な義務は共同研究への参加義務です。共同研究は所内のメンバーを中心に所外の専門研究者の協力を得て組織されます。ふつう3～5年の計画をたてて研究し、最後に研究報告を出版して任務を完了します。

中国近代史の共同研究班が正式に組織されたのは1965年4月のことです。(それ以前にあったのは有志者のつどう研究会です。)故小野川秀美先生が班長で、小野川先生の退職(1973年3月)まで8年間、“辛亥革命の研究”をテーマにしてつづけました。形式的にははじめ5年、ついで3年の2期でしたが、実際には1期とおなじことでした。1978年に筑摩書房から刊行された《辛亥革命の研究》がその研究報告です。ほかにも《民報索引》上下(京都大学人文科学研究所刊 1970, 1972年)等の重要な副産物も生みだしました。

ついで1973年4月から、島田虔次先生を班長に「五四運動の研究」をテーマとする共同研究が発足しました。それは1978年3月まで五カ年計画でしたが、さらに1983年3月までの5年間、「民国初期の文化と社会」と看板をかけかえて、同時期の研究をつづけました。前者の研究報告として《五四運動の研究》全5函を目下刊行中であります。

(1982年3月に第1函、1983年12月に第2函を刊行。〔補〕その後、1985年1月に第3函も刊行した。)その副産物が《日本新聞五四報道資料作成》(京都大学人文科学研究所刊 1984年2月)です。ついで、わたしたちは昨年(1983年)4月から「国民革命の研究」の五カ年計画にとりかかりました。現在の班員は31名です。そのうち所内のメンバーは5名、所外からの参加者はそのほとんどが京阪神の大学に奉職している研究者です。(大学院生は博士課程でないと正規の班員にはなれませんが、修士課程生も準班員として参加しています。)

わたしたちの研究班の特色としては、「自由」な学風をあげることができると思います。貴国の成句を借りれば、「百花斉放、百家争鳴」であります。わたしをふくめて数人のものは史的唯物論者ですが、班員の多くはそうではありません。しかし史観はちがっても、事実在即して正しい結論を導きだすよう務める、という点での共通の基盤は確固としてあります。

研究班は毎週1回、年平均24回くらい開催しています。毎回3時間前後、ふつう前半で研究報告を聞き、後半で討論します。班員はおよそ年に1回報告するわけですが、報告をかさねながら論文を作成していきます。《五四運動の研究》もこのようにして作られました。

わたしたちが五四運動の研究をはじめるとき、日本での研究としてはつぎのような業績がありました。まず、日本における五四運動研究の出発点になったものとして、

野原四郎〈アナーキストと五四運動〉(《講座近代アジア思想史》中国篇1 弘文堂 1960)

があります。これは啓発性に富む、すぐれた研究です。ついで、

丸山松幸《五四運動》(紀伊国屋書店 1969)

小野信爾〈五四運動と民族革命運動〉(《岩波講座世界歴史》第25巻 1970)

嶋本信子〈上海における五四運動〉(《史論》第20～22号、1970)

野沢豊等編『講座中国近現代史』第4巻(東京大学出版会 1978)

丸山先生の著作は日本における五四運動の専著としてもっとも早いもので、思想史を中心とするすぐれた研究です。政治史的研究としては小野先生の論文が豊富な内容を具体的に分析した重要な作品です。嶋本女士の研究は工人階級の役割をとさらに強調したところに特色があります。(それとは逆に資産階級の役割をとくに強調したものもあります。)野沢先生の編にかかる書物は〈五四運動〉という副題が付されており、古厩忠夫〈労働運動の諸潮流〉等の注目すべき研究もふくまれています。

わたしたちの《五四運動の研究》はこれらの先行業績をふまえて出されました。いくらか日本の学術界に寄与するところがあると考えていましたところ、嬉しいことに、第1函刊行後おおくの批評が新聞雑誌に掲載されました。貴国の《歴史研究》1982年第6期にのった張契尼^{チャンチーニ}先生の紹介文〈日本京都市の五四運動研究〉はみなさん御存知の方もおられると思います。

批評の文章で注意せねばならないのは、いうまでもなく反対意見であります。それを取りあげるに先だって、ここでわたしたちの研究のテーマ、既刊の文章の題目をあげておきます。第1函には3篇の文章をふくんでいます。

第1分冊 狭間直樹《五四運動研究序説》

第2分冊 片岡一忠《天津五四運動小史》

“3” 藤本博生《日本帝國主義と五四運動》

第2函には以下の4篇がふくまれています。

第4分冊 森時彦《五四時期の民族紡績業》

“5” 陳來幸^{チエンライシン ユイシアチン}《虞洽卿について》

“6” 林原文子^{スウツォーヂオウ}《宋則久と天津の国貨提唱運動》

“7” 川井悟《華洋義販会と中国農村》

これらの研究はいずれもそれぞれに有意義なものであると自負していますが、異論がとりわけ集中したのはわたしの文章にたいしてでした。そこには日本の五四運動研究の現況がよく反映されていると考えられますので、以下、3点にしぼって問題点をみていきたいと思います。

〔Ⅱ〕 若干の論争問題をめぐって

①新民主主義革命はいつ始まったか？

わたしは《五四運動研究序説》(以下、《序説》と略称)の最初で、新民主主義革命が五四運動に始まることは、現在では学界の通説といってよい、と述べました。この意見は多くの人に認められているだけでなく、自分で五四運動の研究に着手して再確認したことでもあります。これにたいして横山宏章先生はつよく反対し、現在の学界には新民主主義革命の開始時期についての定説はなく、新民主主義革命の内容として階級的自覚ないしプロレタリアートの指導を問題にするなら、その開始は中共創立後、さらには五卅運動にもとめるべきだとされます(《アジア研究》第30巻1号)。それでは中共創立前には新民主主義革命は起りえないし、五四運動は旧民主主義革命の性質の運動だということになるわけですが、ほんとうに五四運動には時代を画する新しい特徴がふくまれていないのでしょうか？ もし新しい特徴がなければ、わたしも横山先生の批判を受けいれねばな

りません。この問題に正しく答えるためには、五四運動の発展過程、とりわけ上海の三罷闘争の展開過程を事実^ニに即して具体的に分析する必要があります。新民主主義革命の開始時期の問題は、つきつめていえば、上海での罷工闘争(いわゆる六三大罷工)にたいする評価如何ということになると思います。ですから、問題をつぎにうつしたいと思います。

②上海の罷工闘争をどう評価するか？

この問題をめぐって、わたしともっとも鋭く対立しているのは野沢先生の意見です(《朝日ジャーナル》1982年8月27日号)。ですから、ここでは主に野沢先生の意見をとりあげます。

大衆的^{ツアオルーリン}愛國闘争としては、曹汝霖等の親日売国三高官の罷免をかちとったことが、五四運動の最大の成果であることは認められてよいでしょう。パリの中国全権が講和条約調印を拒否したことももうひとつの重要な成果ですが、それは三高官罷免と密接に関連した出来事だったと思われます。三高官罷免に決定的な打撃をあたえたのは上海の三罷闘争、とりわけ罷工の威力です。(断わるまでもなく、こういったからといって、5月4日らしいの北京をはじめとする全国の運動の役割を軽視するのではなく、むしろその前提あるいは基盤あつてのうえでの上海の罷工の役割を評価しているのですが。)わたしはこの上海の罷工に時代を画する新しい特徴がふくまれていたと見ているのですが、野沢先生はそれに反対してこう言われます。上海の罷工闘争はなんらの新しい意義をふくむものではなく、それは日本反対、安徽派軍閥反対闘争の一部であるにすぎない、と。

ほんとうにそうでしょうか。わたしたちは歴史のほんらいの様相を注視せねばなりません。

上海の罷市は6月5日に始まりました。これについては意見の分岐はありません。運動の指導部は、簡単にいえば、上海商工学報連合会であり、

その路線はブルジョア民族主義路線です。罷工闘争におけるブルジョア民族主義路線の主要なあらわれは、日本の在華企業での罷工を提唱するが、その他の企業での罷工には反対することです。そのような状況のもとで、大規模な罷工は決して6月5日から始まったのではなく、6月8日夜から9日にかけて発生したのです。この点では野沢先生と意見を異にしますが、その考証は《序説》でしておきました。要するに、全面的罷工を実現しようとしていた勢力（当時かれらは“過激派”とよばれていた）が、ブルジョア民族主義の罷工路線に逆らって破天荒の政治的大罷工を実現したわけです。これをわたしはプロレタリアートの階級的自覚のひとつの標識だと考えます。また五四運動のなかで現れた時代を画する新しい特徴だと考えています。

上海での罷市の被害がきわめて深刻なときに罷工の脅威がかさなったわけですが、ここにロシア革命の影響をみてとることは自然でしょう。ボルシェヴィズムは搾取階級にとってきわめて恐るべき“過激”思想であって、それへの漠然たるおそれにくわえて、半植民地中国の金融経済の中心＝上海の秩序崩壊の危険性が目前にせまったのです。この危機に直面した支配階級がやむをえずに採った手段が親日売国三高官の罷免という局面打開策だったわけです。上海における空前の大罷工の出来（くりかえしますが、運動の全国的高揚の意義を無視するわけではありません）をまえにして、支配階級内部の矛盾が拡大され、運動は大きな成果を獲得するわけですが、その決定的なヒキガネとなったのが、ブルジョア民族主義の闘争路線に逆らって実現された上海の大罷工だったのです。これは新しい現象です。ですからわたしは新民主主義革命が五四運動にはじまる、とすべきだと考えるわけです。

ここで一言、貴国の研究に言及させていただき

ます。当然、わたしたちは五四運動の研究を始めにあたりまず貴国の研究から学びました。わたし自身は、とりわけ御在席の彭明先生の《五四運動在北京》を丁寧に使わせていただきました。それから自分なりに研究をすすめたのですが、わたしの五四運動にたいする評価は貴国におけるそれと基本的には一致していると思います。しかし、もちろん異なる部分もあります。たとえば、貴国の代表的な著作のひとつであると思われる李新・^{リー・シン}陳鉄建先生主編の《中国新民主主義革命史》^{チエンティエチエン}多巻本の第1巻《偉大的開端》では“六三大罷工”の新たな特質として以下のことを指摘しています(pp. 99～103)。

1. それは政治的罷工であり、……工人階級の高度の愛国主義精神の発露である。
2. 工人階級はまったく自主的・自発的に六三大罷工に参加した。……しかも罷工を発動する過程で、中外反動派の破壊、資本家の妨害と学生の“阻止勧告”を断固としてつき破ったのである。
3. 工人は罷工闘争中にギルド（行会）観念を打破しはじめた。

これらの3点はいずれも重要な指摘であり、第1と第3についてはとくに異論はありませんが、第2の点について私見を申しあげたいと思います。

それは学生と工人階級とを対立的にとらえるのではなく、当時の運動の指導思潮であるブルジョア民族主義の路線に逆らう形で（決して敵対してではなく）学生をもふくむ過激派の登場をみたということです。“阻止勧告”をしたのは学生ですが、それは学連指導部であって、罷工をあおったのも他の部分の学生だったわけで、いわばそのせめぎあいのなかに思想面での新しい特徴がよく出ていたと考えるのです。

また、いわゆる六三大罷工は一色のものではなく、二つの段階にわけて考えるべきだとも思います。第1段は6月5日の罷市開始から8日まで、

第2段は8日以降です。8日は闘争の緊張が格段に高まった日で、その日の夜から翌9日にかけて空前の大罷工が爆発しました。8日以前にも罷工はありましたが、小規模なものです。8日の緊張が淞滬護軍使盧永祥に曹汝霜等罷免要求の大総統宛電報をうたせ、さらに翌日の大危機に直面して江蘇督軍李純の曹等罷免要求密電となるわけです。日本の外交官の報告によれば、徐世昌に三高官罷免の決意をかためさせたのは李純の密電であるとのことですが、大衆闘争の高揚が支配階級内部の分裂に有効に作用して三高官罷免という偉大な勝利が獲得されたわけです。

ついでに言えば、嶋本先生も罷工の重要性を強調されます。しかし工人階級の革命性を過度に強調し、学生全体と工人全体とを対立させてとらえるのには賛成できません。罷工をけんめいに追求した当時のいわゆる過激派は一部の学生とインテリをも含むものです。かれらの思想に限界があるにしても、かれらは働く者が主人公である平等社会の建設を目指すものでした。くわえて当時の過激派と学連の執行部の間の矛盾はけっして敵対的なものではなく、人民内部の矛盾だったと思います。あるいは矛盾というより分岐といった方がよいかも知れません。

③上海の罷工闘争は反帝闘争ではないか？

野沢先生はわたしの《序説》を批評して、上海の罷工闘争には新しい特徴はなく、それは“反日反安徽派軍閥の闘争”の枠内のものでしかない、と主張されます。別の言いかたをすれば、五四運動の全過程はけっして“反日反安徽派軍閥の闘争”の枠をこえるものではないこと、そのばあい、英米等帝国主義もこの“反日反安徽派軍閥の闘争”の隊列にくわわってきたものであると主張されます。

第一次世界大戦の終結後、英米帝国主義と日本

帝国主義のあいだの矛盾がたいへん尖鋭化したこと——これは言うまでもない事実で、だれしもの認めるところです。そればかりでなく、資料を偏見なしに読めば、五四時期の中国人は一般にアメリカにたいして好感をいだいていること——これも認められねばなりません。たしかに、中国人民の憎悪は日本帝国主義とその走狗に集中しました。それこそ五四“愛国”運動の客観的な基盤であります。

具体的にみれば、上海での五四運動の開始期には、租界当局（共同租界もフランス租界もふくめて）はこの運動に比較的融和的な方針をとりました。日本側は当然それに不満で、日本の駐上海領事はたびたびもっと強硬な方針をとるよう租界当局に要求しています。欧米側はその要求をさして意に介することなく、むしろ日本が打撃を被ることを喜んでいるふしさもあります。6月5日の罷市開始後も、運動の突然の高揚にたいしてしかるべき予防措置を講じているとはいえ、かれらはなおも従来の方針をとりつづけています。

しかし、6月8日にいたり、かれらの方針はまったく変化しました。かれらはたんに大罷工反対の宣伝活動を開始したのみならず、活動家の租界通行禁止令をだしました。運動が大罷工にまで発展するという事態に直面して、欧米帝国主義はそれまでの融和的な方針をなげすて、空前の大衆闘争に直接に敵対せざるをえなくなったのです。このようにして、反日闘争として出発した愛国運動は反帝国主義運動の性質を帯びるにいたったわけです。このようでありますから、わたしは五四運動の最高峰である上海の三罷闘争が反日闘争の枠をこえて帝国主義反対の闘争にまでつきすすんだと考えるのであって、運動が終始反日反安徽派の枠内にとどまり、英米がその運動の隊列のなかにあったという野沢先生の意見には反対なのであります。

ついでにふれておけば、五四運動が反日反安徽派軍閥の闘争であったというこの命題は野沢先生にとってほとんど絶対的なもののようです。かれによれば反日反安徽派軍閥の陣営には、日本以外の英米帝国主義、および安徽派以外の直隸派軍閥等がみなふくまれます。その図式はきわめて簡単なものであって、五四運動とは上述の反日反安徽派勢力が日本帝国主義とその走狗にたいする闘争の総和にすぎないのです。これを要するに、野沢先生の理解にしたがえば、五四時期の中国人民は、英米帝国主義および直隸派等の軍閥勢力とおなじ立場に立って、ともに反日反安徽派の闘争をおしすすめた、ということになると思います。とうてい、わたしはこの意見に賛成できません。

英米帝国主義が大衆運動にどう対処したかについてはさきに簡単にふれましたが、直隸派軍閥についていうなら、李純にしる湖北督軍王占元にしる、かれらはみな運動を妨害し弾圧しました。安徽派と他の軍閥とのあいだには当然ながら矛盾がありますが、しかしそれはやはり支配階級内部の矛盾であります。五四運動がおこったとき、直隸派は支配階級内部の非主流派でしたから、かれらは安徽派が打撃をこうむることを歓迎しました。たとえ、当初にいくらか融和的な態度をみせたばあいにも、支配秩序に危険な影響ありとなれば、かれらはすぐさま反革命の本質をあきらかにしました。同時にかれらはできるかぎり大衆運動を鎮静化するために努力しています。淞滬護軍使盧永祥（もともとは安徽派ですがこのときは中間派です）の態度はその一例です。かれは6月7日の晩に戒嚴令を發布し、また8日には三高官罷免要求の電報を打っているのです。つまり、五四運動は野沢先生のいわれるような日本・安徽派陣営とそれ以外の陣営の闘争なのではなく、大衆的な愛国闘争の高揚が支配階級内部の暗闘をひきおこし、その暗闘がひきがねになって具体的な成果をひきだした複雑な闘争である、とわたしは考えます。

反日愛国闘争が反帝国主義闘争の色彩を帯びるにいたったこともその複雑性の重要な一表現であります。

以上、最近の日本における五四運動研究の若干の問題について話させていただきました。たいへん簡単な紹介ですが、重要な問題はとりあげたつもりです。上にふれなかった問題、たとえば“過激派”の概念については、さらに研究をすすめています。それに関する論文を“民国初期の文化と社会”研究班の論文集に発表するつもりです。報告を終らせていただきます。この話が“抛磚引玉”の役をはたし、もろもろ御教示を得られることを心から望んでいます。